



仙台市科学館 蒲生調査レポート 速報版

No.1
2011.4..15

〒981-0903 仙台市青葉区台原森林公園4番1号
仙台市科学館 事業係
TEL:022-276-2201 FAX:022-276-2204
<http://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/>

蒲生干潟が受けた被害と再生の可能性



Fig.1 震災前の干潟の様子



Fig.2 震災後の干潟の様子

干潟の変化

野鳥やカニ、ゴカイや貝類など生物であふれた蒲生干潟は、先日の津波で大きな被害を受けた。仙台市科学館では4月13日に蒲生干潟に入り調査を行った。

Fig.1は震災前の蒲生の様子である。アオサギやダイサギなどを多数観察することができた。Fig.2は同じ場所を震災後に写したものである。鳥がいないのはもちろんだが、海水がより内陸側へ入り込んでいた。(観測時の潮位は 30cm程度)七北田川の導流堤付近でもFig.3のように以前干潟が見られた部分が完全に水面下になっていた。これらは蒲生干潟が沈降したことを示していると思われる。



Fig.3 導流堤付近

沈降の結果水面が上昇すれば、干潟という環境そのものが失われる可能性もある。科学館では今後の蒲生干潟の様子を調査し、どのように変わっていくのかを確認して行きたい。

干潟再生の可能性

干潟を歩き回り、生物を探した。確認できたのはアシハラガニ2匹(Fig.4)、カニの巣穴、ウミネコ(Fig.5)くらいである。この中で数多く確認されたのはウミネコだけであった。ウミネコは干潟の食物連鎖で頂点に立っている生物である。ウミネコを支えるためには、餌となる生物が食べられても全滅しないほど沢山いなければならない。この日の観察では、多数のウミネコを養える豊かさはない。「鳥の楽園」と呼ばれた蒲生干潟は、野鳥の餌となる生き物にとってもやはり楽園であったのである。

以前の姿を知る者にとっては「これだけしかいなかった」ということになる。しかし、「ゼロではなかった」ととらえることもできる。ゼロは何倍してもゼロであるが、生き残った生物がいれば、そこから回復していく可能性がある。わずかに残った生物やその痕跡を頼りに「干潟がよみがえる」ことを信じ調査を続けて行きたい。



Fig.4 アシハラガニ



Fig.5 ウミネコ

(佐藤 賢治)